

絶滅危惧種も！博物館の敷地内に生えるコケたち

岩浪 創

自然の博物館には何種類のコケが生育するのか？

自然の博物館の敷地内には、一体何種類のコケが生えていると思いますか？私はシダ・コケ専門の学芸員として令和6年に当館に着任しましたので、まずは敷地内のコケを知ろうと思い、早速調べてみることにしました。お昼休みや仕事の隙間時間を利用しせっせと庭に出て、採取した標本は合計100点以上。顕微鏡を使って標本一点一点の詳しい種類を調べてみたところ、なんと50種類以上ものコケを確認することができました。日本国内でこれまでに確認されているコケはおよそ2,000種類とされていますから、その40分の1にも及ぶコケが、1haにも満たない当館の敷地内で発見されたことにはとても驚かされ、また、コケを調べる楽しさを再認識する出来事になりました。コケは種類によってある程度生える環境が決まっているのですが（例えばキイウリゴケは樹幹だけに、ハタケゴケ類は土の上だけに生えます）、屋外展示「カエデの森」に植栽されたカエデの樹幹やその林床、「岩石園」の石灰岩や蛇紋岩などの岩上、前川國男氏設計の打ち込みタイル式の館の外壁など、様々な生育基物が見られることが、当館に豊富なコケ相を生み出している要因になっているのではと考えています。

絶滅危惧種「ヒメシワゴケ」を確認！

調査で確認したコケは、人里にもよく生える一



写真1. ヒメシワゴケ 鈍い緑色を呈するのが特徴

般的な種が殆どでしたが、中には県内での記録が少ない希少な種も含まれていました。

ヒメシワゴケは西日本に分布の中心を置く暖地性のコケで、主に樹幹に着生します。埼玉県内ではこれまで東部を中心に3地点で記録されているのみで、埼玉県レッドデータブック植物編2024では絶滅危惧IB類に選定されている希少な種なのですが、当館のイロハモミジの樹幹に沢山生育していました（写真1）。葉の細胞に小さな突起（パピラと言います）が沢山あることが識別のポイントで（写真2）、これが光を乱反射するため、植物体全体がすりガラスのような鈍い緑色をしています。写真ではヒメシワゴケのカッコよさが伝わりきらないのが残念です・・・。

おわりに

コケはその小ささから見過ごされることが多いですが、最近ではインテリアとして注目されるようになりました。また、令和7年6月15日に当館で開催した自然史講座「身近なコケを調べよう」では、60名を超える方からの応募があり、生き物としての「コケ」に対する関心も高まってきているのだと嬉しく思っています。皆さんも是非、ひとりと生えるコケたちに目を向けてみてください。身近な環境に、素敵なかけの世界が拓がっています。

（いわなみ つくる・学芸員）



写真2. ヒメシワゴケの葉の拡大 パピラが目立つ